［32］

氏　　名	山下（やました）　大輔（だいすけ）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学　位　記　番　号	博第 522 号
学 位 授 与 の 日 付	2021 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学　位　論　文　題　目	異系統土器の共存からみた九州縄文文化の研究
論　文　審　査　委　員	主 査　教　授　米田　文孝
	副 査　教　授　野間　晴雄
	副 査　准教授　井上　主税
	専門審査委員　客員研究員　森岡　秀人
	（公益財団法人古代学協会）

論 文 内 容 の 要 旨

山下大輔氏の博士（文学）の学位請求論文『異系統土器の共存からみた九州縄文文化の研究』は、本学大学院在籍中に参加した鹿児島県姶良市所在の建昌城跡の発掘調査における知見を出発点とされている。大学院修了後、山下氏は宮崎県都城市教育委員会に奉職されたが、本論文はこの間に積み重ねられた発掘調査と、それにともなって出土した土器資料の実証的な調査研究成果から導き出した編年研究を根幹としている。

特に、本論文では南九州における縄文時代早期中葉期の土器型式編年の確立を企図し、当該時期の土器資料の吟味・分析を実践する。この作業では、在地の貝殻文円筒形土器のみならず、同時期に西日本一帯に広く展開していた押型文土器や、九州島内に広域的に分布する政所・中原式土器、九州島東南部の地域型式である別府原式土器なども視野に、複数系統・系列の土器型式を包括した編年観の提示を目論んでいる。

さらに、実資料を基礎とした検討結果から、土器型式編年に看取できる異系統土器間の関係性の解明と、その背後にある人間集団の行動や集団間の関係性、さらにそれらが生み出す社会的な変化を明らかにすることも目的として試みている。本論文は全 5 章 10 節から構成されるが、全体の章・節の構成は次の通りである。

第 1 章　縄文時代早期における異系統土器の共存－序論にかえて－
第 2 章　南九州の縄文時代早期土器編年
　第 1 節　下剝峯式および桑ノ丸式土器の再検討
　第 2 節　南九州押型文土器の編年

第 3 節　押型文土器の地域性
第 4 節　円筒形押型文土器の位置づけ
第 5 節　中原式土器の位置づけ
第 3 章　土器資料からみた異系統土器の共存
第 1 節　五十市式土器の評価
第 2 節　押型文土器と五十市式土器の関係
第 3 節　南九州の円筒形押型文土器とその周辺
第 4 章　遺跡からみた異系統土器の共存
第 1 節　遺構内出土資料からみた異系統土器の共存
第 2 節　炉穴の年代と異系統土器の共存
第 5 章　結論

第 1 章では、南九州の押型文土器研究に焦点を当て、その研究史をアカホヤ火山灰の発見前と発見後に区分して概観し、今日的な研究レベルでの問題点の再吟味と抽出を行っている。その中で、押型文土器は従来、貝殻文円筒形土器に少量伴う外来系の土器として理解されてきたことを指摘し、南九州地域独自の押型文土器編年の必要性を再確認する。

このような貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係については、遺跡内における両土器群の出土状況や両者の要素を取り入れた折衷的な土器の存在とその検討、炭素 14 年代測定値からの位置づけ、さらには押型文土器の型式編年に基づく貝殻文円筒形土器との関係性の追求などといった複数の視点からのアプローチの存在を確認し、各々の方法論における現時点での到達点と問題点を明確に整理した。さらに、このような研究の現状を明確に認識することに加え、異系統土器の共存という現象の背後にある人間集団の動態に関して、土器資料の観察と遺跡における出土状況から考察するという本論の課題を示した。

第 2 章は、これまで実践してきた土器編年、特に南九州地域の縄文時代早期中葉期の土器編年について個別に詳述し、それぞれの土器系列における相互関係の解明を目的とした。

第 1 節では、先行研究において時間的に前後する型式群と理解されていた、下剝峯式土器と桑ノ丸式土器の再検討を行う。器形や口縁部形態、文様構成に焦点化して分析した結果、両型式は共通するバリエーションと変化の方向性を示すことから、時間的に併行する同時期の土器群であることを明らかにした。また、これらの土器群は口縁部文様帯の有無や外面の施文方向などの変化から、少なくとも 4 段階の変遷過程が存在することを示した。

第 2 節では、南九州地域における独自の押型文土器編年を提示する。この山下氏が新たに編成した編年案は、研究が先行していた大分地域の編年案を援用することが多かった当該地域において、初めて樹立された編年案であったことも重要である。この編年案の作成では、宮崎・鹿児島両県の出土資料を総合的、悉皆的に集成・検討し、押型文土

器を 13 の類型に整理・分類する。この作業により、当該地域における押型文土器の流入期である第 1 段階から、押型文土器の単純期となる第 4 段階までの各段階を時間軸上に配列し、南九州地域独自の編年案を提示している。その結果、従来から注目されてきた「桑ノ丸式器形の押型文土器」は、南九州押型文編年の第 3 段階の資料であること、さらにそれに先行して第 1 段階から横位施文の円筒形押型文土器が展開していたことを追認する。また、第 4 段階には南九州地域でも、押型文土器の単純期を迎えたことも指摘するなど、獲得された成果は多岐に及ぶ。

第 3 節では、南九州地域の押型文土器の地域性を探る中で、宮崎中南部から大隅半島北部を中心に分布する「白ヶ野下層式土器」の設定を行う。この土器型式は、口縁部内面の稜とそれ以下の内面がケズリによって調整されるという特徴を有す。また、口縁部の屈曲度と内面稜の文様帯の拡大という変異から、古段階と新段階の細分が可能であり、特徴となる器形と内面の調整技法の類似性から、桑ノ丸式土器の影響を受けて成立した土器型式であることを示した。さらに、白ヶ野下層式土器の成立と展開は南九州独自の押型文土器の開花を意味し、当該土器型式の新段階の成立が南九州でも押型文土器の単純期が存在したことの傍証になると考えた。

第 4 節では、南九州地域の円筒形押型文土器の編年的位置づけを考えるとき、重要な位置を占めている西北九州地域に分布する「弘法原式土器」の再検討を加えた。南九州地域で出土する桑ノ丸式器形の押型文土器は、以前から弘法原式土器との類似性が指摘されてきたが、それに起因して押型文土器の中でも最古の資料と位置づけられていた。しかし、本論では両型式の詳細な観察から口縁の端部形態や内面調整技法、胎土の相違などを確認することを通じ、これらの土器型式は全く異なり、従来の見解である南九州地域の桑ノ丸式器形の押型文土器を古段階の資料とする見解は根拠に乏しいことを指摘する。また、弘法原式土器との関連性が看取できるものは、桑ノ丸式器形の押型文土器に先行して展開していた横位・斜位施文の円筒形押型文土器であることという重要な見解を提示している。

第 5 節では、長崎県島原半島や熊本県を中心に分布すると推定されていた中原式土器について、丹念に出土遺跡の集成を行うことから、宮崎県内でも多数出土している実態を確認した。さらに、宮崎県内全域で出土が確認されるが単独で出土することや、他の土器群と比較しても主体的に出土するが皆無であることなどを指摘する点も重要である。また、同一遺跡内における他型式に帰属する土器との共出関係から、別府原式土器や下剝峯・桑ノ丸式土器、押型文土器を伴なって出土する傾向も看取している。

第 3 章では、異系統土器の要素を取り入れた折衷土器の存在から、第 2 章で示した押型文土器を中心とした編年観の根拠を補強している。

第 1 節では、「五十市式土器」を俎上に再度、口縁部形態の分析を加えている。その結果、従来の桑ノ丸式土器との関係性を重視する言説を追認するとともに、施文される文様が南九州地域ではきわめて類例の少ない縄文であることから、桑ノ丸式土器の器形に西日本一帯に分布する押型文土器に通有な縄文施文土器の文様が施文された、折衷的な土器であることを指摘する。

第 2 節では、前節で分析・吟味した「五十式土器」の型式的特徴の一つである、口縁端部の刺突という属性に着目し、その編年的位置づけを再検証する。具体的には五十市式土器が出土した宮崎県都城市内の諸遺跡から出土した関連資料を俎上に、それぞれの資料の特徴を抽出するが、五十市式土器と同様に口縁部内面に刺突文を有す資料は押型文土器に多いことを確認するという結果を得ている。さらに、刺突の形態や施文方法などから、刺突自体は押型文土器にみられる原体条痕から派生した可能性を想定する。あわせて、五十市式土器のもう一つの特徴である「縄文」に関しても、押型文土器にともなって出土する縄文施文土器の影響が及んだものと推測する。

第 3 節では、岡本東三氏が提示した南九州地域の押型文土器とその周辺の土器群に関する編年案を再検証し、その妥当性を考察する。先に岡本氏は政所式と別府原式との近縁性を指摘した上で、別府原式から政所式への変遷過程を想定し、中原Ⅲ～Ⅴ式と政所式の間に別府原式を措き、従来の編年観とは逆行する変遷を推定したが、山下氏は底部形態からも岡本氏の編年観には齟齬があり、従来の政所式（中原Ⅱ式）から中原Ⅲ～Ⅴ式への編年観を支持している。さらに、岡本氏は円筒形押型文土器として弘法原式土器を政所式に続く型式として位置づけるが、これも底部形態の変化の方向性を考慮した場合、その蓋然性は低い。このように、岡本氏と筆者の編年観は政所・中原式土器や弘法原式土器の位置づけなどの点で相違するが、これまでの円筒形押型文土器をはじめとする土器資料の検討および遺跡での出土状況を根拠とし、筆者の編年観がより蓋然性が高いことを示した。

第 4 章では、遺構内での共出事例から異系列土器群の関係性を検討し、土器型式編年で導き出した結論の妥当性を検証・補強することを目的としている。

第 1 節では、貝殻文円筒形土器と押型文土器との関係性に関する、山下氏のこれまでの研究成果を整理・吟味する。すなわち、貝殻文円筒形土器（下剝峯・桑ノ丸式）と押型文土器、特に後半段階の資料には強い関係性があるという認識を再確認するが、この認識を出発点に遺構内で共出した事例を俎上に載せて詳細に検討する。その対象は宮崎県内で確認されていた 4 遺跡に、近年、宮崎市で確認された上猪ノ原遺跡第 4 地区を追加した 5 つの事例である。その結果、下剝峯・桑ノ丸式土器と押型文土器の大部分が時間的に併行関係にあること、すなわち異系統の土器が併存していたという結論を導き出している。さらに、土器の型式学的検討から獲得した結果と同様、下剝峯・桑ノ丸式の前半段階と押型文土器の前半段階が、下剝峯・桑ノ丸式の後半段階と押型文土器の後半段階が共出関係にある状況を素描する。

第 2 節では、山下氏が調査を担当した宮崎県都城市所在の王子山遺跡で確認した縄文時代早期の炉穴遺構に焦点を当て、煙道を共有しつつ 2 つの炉穴が上下に重なる特異な炉穴遺構の紹介と、宮崎県内検出の炉穴遺構の悉皆的な集成を行う。その結果、鹿児島県で従来は早期前葉に盛行するとされていた炉穴遺構が、遺跡内で供出する土器型式の分析成果から、宮崎県では早期前葉末から中葉にかけ、時期差を保持しながら展開していた可能性が高いことを指摘する。さらに、炉穴遺構内から貝殻文円筒形土器の石坂式と、宮崎平野部を中心に展開する地域型式である別府原式土器が共出することを確認し、

これを異系列土器が共存する具体的な事例と措定することも、議論を実証的に促進する重要な成果である。

第5章では、これまで本論で提示してきた南九州地域における貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係性についての考察結果を詳述するとともに、政所・中原式土器や別府原式土器も含めた異系統土器が同時期に共存した状況を示す、山下氏独自の総合的な編年案を提示している。

このような編年観から導かれる結論として、当該時期の南九州地域ではこれら2つの系統のみならず、別系統・別系列と推定できる土器群が微妙に分布域を違えながら展開していた状況を明らかにする。さらに、これら複数系列の土器群が同時期に共存していた現象の背後に看取できる、土器製作者の移動と土器情報の浸透・定着過程とその要因についても考察・言及する。

その成果を概述すると、南九州地域における異系統土器の流入・定着過程は定速的に実現したものではなく、各系統・各系列でその様相は異なることを示した。すなわち、いかなる状況でも適応できる一般法則ではなく、土器製作者の移動と定着、土器の地域的変化の発現のパターンは、いくつかの類型が看取・設定できることを確認する。

特に、押型文土器は南九州地域内に一気呵成に流入し、在地の円筒形押型文土器文化と融合したものではなく、継続的かつ波状に土器情報がもたらされた結果、早い段階で南九州地域独自の変化が看取できるようになったと推定する。この状況に対して、政所式・中原式土器は強い浸透力をもって流入し、早い段階で在地の土器と融合、新たな型式的特徴を備えた土器群を生み出したものと想定する。

さらに、このような人間集団の動態は、晩氷期以降の気候温暖化などの自然環境の変化にともない、縄文時代早期の早い段階で定住化や独自の土器文化の醸成を達成していた南九州地域だからこそ、引き起こされた現象であると結論づける。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本論文は、南九州地域の縄文時代早期中葉の土器編年について、従来の在地の貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係性のみに着目する研究動向に対し、それ以外にも複数系統の土器群が展開・錯綜していた実態を、あくまでも実証的に明らかにしている。さらに、異系統土器が同時期に展開する状況を、土器の移動とその背景にある集団関係やその社会的変化の把握に至るまで肉薄・理解することを通じて、総合的に当該時期の社会を復元しようという試みも高く評価できる。これら一連の成果は、遺跡における土器資料の出土状況とそれ自体に対する詳細な観察に重きをおき、対象とする時代・地域に関わらず悉皆的に観察するという、山下氏の実証的かつ愚直ともいえる真摯な研究姿勢に裏付けられている。以下、本論において山下氏が提示する独創的な着眼点や優れた成果

を要約する。

第一に、これまでの南九州地域における押型文土器の研究情勢について、貝殻文円筒形土器との関連性の追求という視点から、研究者や公表時期などで異なるアプローチを峻別し、各々について的確に研究史をまとめている。それを通じ、今日的な調査研究の到達点と今後の研究の方向性を明確に把握する。その結果、本論文の主体を構成する土器の型式学的研究に加え、遺跡内における出土状況の詳細な分析や、炭素 14 年代測定法をはじめとする理化学的な分析の積極的導入など、複数のアプローチから総合的に吟味・検討する必要性や、蓋然性の高い見解・結論を模索する必要性を提起する。すなわち、各分野の立場から結論の正当性を提示のみならず、それらの論説を相互に補強・検証することが、今後の調査研究の進展を促進するためには必要不可欠である観点を、これまでの研究史を振り返ることで明確に示した点で重要である。

第二に、本論文の白眉である独自の編年研究の成果である土器型式案を提示する。まず、南九州地域の在地土器と理解される貝殻文円筒形土器文化の後半期に位置づけられる下剝峯式土器と桑ノ丸式土器の再検討を行い、従来の両土器型式が時間的に前後するという編年観に代わり、両土器型式がともに前段階の石坂式に系譜を遡及することができる同時期の土器群であるという編年案を示した。この見解により、当該地域の早期中葉期の土器型式の変遷について、矛盾を生じずに理解することが可能になった重要な成果である。

また、必ずしも調査研究の進展が顕著ではなかった南九州地域の押型文土器についても独自の編年案を提示し、この時期に展開したであろう複数の異系統土器群を同一の俎上で議論することを可能にした成果も重要である。さらに、この押型文土器編年の中で、南九州地域に独自の型式の存在を抽出し、当該地域に押型文土器の単純期が存在することの傍証とした。さらに、これまで単一時期の所産と評価され、南九州地域において最古の土器群と理解・評価されてきた円筒形押型文土器についても、詳細な再吟味・分析を加え、独自の編年観を示している。

さらに、この編年観を通じて、その類似性から九州島の中では最古段階の土器群と措定されていた弘法原式土器と、桑ノ丸式器形の押型文土器の型式的特徴とを比較検討し、両者は似て非なる土器型式であると結論づけた。この成果により、長年に及んで議論が継起されてきた桑ノ丸式器形の押型文土器の編年的位置づけが確定し、さらに円筒形押型文土器が複数段階にわたって存在したことが明らかとなった。これらの成果は、いずれも詳細な土器資料の観察から導き出された見解であり、当該地域における貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年研究、さらに両者の連関性に関する調査研究の一里塚と高く評価できよう。

第 3 章では、このような土器編年案の蓋然性について、複数系統の土器の諸要素を取り入れた、いわゆる折衷土器の存在から補強している。同様に、第 4 章でも遺跡内における該当資料の出土状況を網羅的に集成・分析し、異系統土器の共出状況について傾向の把握に努めているが、ここでも採用された方法論は、土器資料を熟覧しつつ個別遺跡内における出土状況を実証的に分析するとあくまでも考古学の基本に忠実なものであ

り、この研究姿勢が南九州地域にみられる異系統土器の共存関係の理解に一石を投じる成果を生み出す原動力となっている。

第三に、上記した土器編年研究とそれを基本的な枠組みとした該当遺跡内における出土状況の理解を基礎に、異系統土器が共存するという実態について、その背景にある集団の移動と土器情報の浸透・定着という視点からの説明が可能であることに言及した点である。この点に関して、南九州地域という限定された範囲内の縄文時代早期中葉という一定期間中においても、各土器系統・系列によって移動の実態や浸透力の相違、定着の程度には大きな差異が看取できるという成果も重要である。

この成果は、各土器系統・系列の土器製作者の移動の類型化を通じ、異系統土器の共存という現象の背後に隠された、人間集団の動向の可視化を試行することに発展している。これまで、南九州地域の貝殻文円筒形土器と押型文土器をはじめとする異系統土器の共存関係について、当該土器の編年学的視点から各々の時間軸上の位置づけを模索する研究成果はあるが、その背景にあるはずの人間集団の移動や社会変動などに関する具体的な要因についての議論は皆無であった。そのような研究状況の中で、この課題について正攻法で果敢に取り組んだ本論文は、今後の研究の可能性や方向性を提示するという観点からも、重要な成果と評価できよう。

さらに、このような異系統土器を携えた集団が南九州地域へ移動した要因として、この時期の急激な気候温暖化とそれに付随する照葉樹林帯の拡大に結論を求める。また、北方から南方への一方向的な移動は、縄文時代早期前葉期までには列島各地に先駆けて達成されていた定住化と、独自の土器型式に代表される独自の縄文文化の形成に起因するものと理解している。すなわち、当該時期の南九州地域にみられる遠隔地移動の要因として、晩氷期以降の急激な気候温暖化と、それが担保した定住化をはじめとする安定した生活様式の確立が大きく関与したとする、考古学の枠組みを超越した示唆的な見解を提示している。

公聴会においても、本論文で提示された諸成果や見解、論点は高く評価され、充実した論文内容に相応した、多岐に及ぶ活発な意見や質疑応答が交わされた。例えば、議論の前提として縄文時代草創期と早期の年代観や、本論で検討する早期中葉期の時間幅を確認する議論や「共伴」と「共出」の用語の定義とその事由に関する議論、押型文土器の九州島以外から受けた影響あるいは九州島以外へ及ぼした影響の有無に関する議論があった。また、具体的な遠隔地移動の距離観に関する議論や、早期前葉と中葉における急激な集落形態の変化に関する議論、複数系統土器・系列が共存する編年観を可視化する各系統・系列土器の分布状況を図示する必要性の指摘など、多岐に及ぶ活発な議論が交わされた。

以上のように、本論文は土器型式に関する編年学的研究と、個別遺跡で確認された当該資料の出土状況の詳細な分析作業を基本として、南九州地域における縄文時代早期の異系統土器の共存関係を考古学的な吟味・分析から実証的に説明し、この現象の背景にある人間集団の動向と社会の変化の実態を明らかにすることを主目的としている。本論文は、従来にない独創的な視点と鋭敏な問題意識から体系的、学際的に論じた専門的な

研究論文であり、周辺分野を含めた学会に裨益する成果と見解を随所に提供している。今後、九州島の縄文時代研究にとどまらず、広く列島における縄文文化の調査研究に資するものと判断する。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。